

ジャズ喫茶の特色について

松井秀文

はじめに

ジャズ喫茶という不思議な空間が日本には存在する。マイク・モラスキーの著書『ジャズ喫茶論』では「ジャズ喫茶——客にジャズ・レコードを聴かせることが主な目的である喫茶店」¹とある。海外ではこのような目的を持つ店は見当たらない。「喫茶店」とは、主としてコーヒー、紅茶、清涼飲料などの飲料や簡易な食事などをその場所で飲食させる事業所のことを指し平成二十六年総務省調査によれば全国に約七万店近くある²。一方、ジャズ喫茶と呼ばれる類の店はとあるジャズ喫茶案内のウェブサイトによると現在六百店あまりとなっている³。この数字だけから判断するとジャズ喫茶の存在は変わり種の喫茶店くらいにしか感じられない。

しかしながら普通の街中喫茶店も個人経営の店が減っていき、全国どこにでもあるチェーン店が増えている現状にあつて個性的なジャズ喫茶の数は無視できないものがある。書店に行くとジャズのアーティストや歴史に関する多くの著作に混じってジャズを流しながらゆつくりとコーヒーを楽しむことの出来る喫茶店のガイドブックも多く置かれている。

筆者は六十年代後半から八十年代前半にかけ、ジャズという音楽に魅せられ、学生時代には全国で活況を呈していたジャズ喫茶を巡り、その後も新しい店が誕生すると仕事の折に同様の店巡りをしていたことがある。今回、戦前から続くジャズ喫茶がなぜ、現代においても都会のみならず各地にも存

在し、人々に支持され続けているのはなぜか、その魅力は何であるのかを歴史や喫茶店の構成要素の点から論じてみたい。

1. ジャズという音楽の持つ魅力

喫茶店に入る目的として、コーヒーを味わったり仲間との会話を楽しむといったこと以外に、そこで聴ける音楽を楽しむというものがある。名曲喫茶、ロック喫茶など多様なジャンルの店があるが、その中でもっとも存在感を示しているのがジャズ喫茶だ。なぜジャズなのか、という点を考えると、そこには他のジャンルにはない特徴が認められる。

『広辞苑』第七版によれば、ジャズとは「二〇世紀初めアメリカ南部のニュー・オーリンズで、黒人のブルース・ラグタイム・ラテン音楽などが白人の音楽と融合してできたポピュラー音楽。アフター・ビートを強調したリズムとスイングを持ち、集団即興演奏を生命とする」⁴。ジャズのスタイルの変遷は大まかに以下のような流れとして表現できる——トラディショナル・ジャズ（ラグタイム→ニューオリンズジャズ・ディキシランドジャズ→ブギ・ウギ→スイング）→モダン・ジャズ（バップ→クール→ファンキー→モード→アヴァンギャルド→フリー）→クロスオーバー・フュージョン。

ジャズ喫茶で多く所有されているレコードやCDは四十年代後半から六十年代後半にかけてのモダン・ジャズが一般的である。音楽の特徴としてはスイング感とアドリブがあげられる。スイング感に関して油井正一は『ジャズの歴史物語』のなかで、以下のような特色を述べている——①「聴いているうちに、身体がひとりで揺れてくるようなジャズ独特のリズム感」⁵、

¹ モラスキー『ジャズ喫茶論』、二七頁。

² 総務省統計局「II・喫茶店の「いま」」

³ ジャズ喫茶案内「全国ジャズ喫茶&ジャズバーリスト」

⁴ 『広辞苑』、一三五八頁。

⁵ 油井『ジャズの歴史物語』、二〇六頁。

②「ベニー・グッドマン楽団の登場とともに脚光をあびたジャズの同義語としての「スイング・ミュージック」」⁶、③「なんらの遠慮も抑制もなく、徹底して楽しむこと」⁷、「イカス＝swinging」⁸。感じ。また村上春樹は『意味がなければスイングはない』のなかで「スイング」とは、どんな音楽にも通じるグルーヴ、あるいはうねりのようなものと考えていただいていい。それはクラシック音楽にもあるし、ジャズにもあるし、ロック音楽にもあるし、ブルーズにもある。優れた本物の音楽を、優れた本物の音楽として成り立たせているそのような「何か」『something else のこと』と書いている。

アドリブはコード進行やモードという決まりの中で自由に演奏していくことをいう。同じ楽曲でもその時々によって異なった演奏になり、イントロとコード進行は同じでも、まるで違う「曲」のような仕上がりになることも多い。『ジャズ音楽には名曲というものは無い。けれ共、素晴らしい演奏、名演がされた場合においてだけ、それは名曲だといえる』¹⁰という言い回しがアドリブの特徴を言い当てている。この二つの特徴を兼ね備えた演奏がジャズの魅力である。

2. ジャズ喫茶の歴史

ところで、ジャズ喫茶はそもそもどのように始まったのだろうか。いわゆるコーヒーマグ店の起りは「明治11年（1878年）の讀賣新聞にコーヒーマグの販売および店内での飲用自由を謳った広告を掲載した」¹¹神戸の放

⁶ 同前、二〇六頁。

⁷ 同前、二〇七頁。

⁸ 同前、二〇八頁。

⁹ 村上『意味がなければスイングはない』、二八三頁。

¹⁰ 野川『ジャズ楽曲の解説』、七頁。

¹¹ 放香堂加琲「店舗紹介／会社概要」

香堂加琲が最初のようなのである。音楽を流す喫茶店に関しては、昭和四年の東京の生活と風俗を綴った今和次郎のガイド本『新版大東京案内』が興味深い。上巻には「神田の神保町近くに、カフェー街の出現したのは、注目すべき現象である。バーと喫茶店を兼ねた瀟洒なカフェーが、裏通り一面に撒き散らされてゐるのである。そしてその店の名さへ、キネマ好きの若い学生にアツピールするやうに、たとへばザンバとか或ひは又センチメンタルにカフェー・カナリヤとかスズランとか、その何れもが白昼から蓄音器を鳴らして正に別天地を造つてゐる」¹²とあり、下巻には「ジャズとレビューとトーカー」としてカフェーとが現代の享楽世界に交流しつゝある世相、それが学生達に反映しない筈はない」¹³とある。「そこは昼は喫茶で夜はカフェ或はバーと変ずる。——かくして彼等一般は教室の講義と、有銭休息所のジャズとを等分にきゝ、近代人たる事、享楽を味得しつゝ生活して行く事の径程をたどりつゝあるのである」¹⁴。同じく昭和四年、当時の状況を酒井真人は著作『カフェエ通』の中で、次のように述べている。「大阪ではもう既に活動寫眞の映寫が許可せられた。ましてジャズにステージ・ダンスなどは、もうとつくの昔である」¹⁵。そして、「今でこそ到るところに、洋酒と清涼劑とを飲ませ、レコードを樂しませる喫茶店といふものが全盛を極めてゐる」¹⁶。横浜のジャズ喫茶「ちぐさ」のオーナーであった吉田衛の「ジャズ喫茶五〇年」という文章のなかに「日本にジャズ喫茶が始まったのは昭和四年ころで、新橋のデュエット、京橋のブランズウィック、浅草のブラウンダビー、銀座のゆた

¹² 今『新版大東京案内 上』、二八五頁。

¹³ 今『新版大東京案内 下』、一七〇頁。

¹⁴ 同前、一七七頁。

¹⁵ 酒井『カフェエ通』、三五二頁。

¹⁶ 同前、三七八頁。

か、下谷のアメリカン茶房、渋谷のデューク、新橋のダットなどが早く、これらの店に私もよく通い、店の在り方を参考にして、横浜の野毛町に「ちぐさ」を開店したのは昭和八年のこと」¹⁷とありこれが事実なら、ジャズ喫茶の歴史は約九〇年前に始まったといえる。昭和初期のジャズ喫茶勃興期においても客の主流は学生たちであったことが多くの資料によって解る。その後、六十年代から七十年代の学生運動が盛んだった頃も東京の中央線沿線や新宿、早稲田、神保町などに多くのジャズ喫茶が存在していた。若者文化とジャズ喫茶は歴史を共に歩んでいるといえる。

3. ジャズ喫茶の特徴

店に入った時に一般の喫茶店とは異なる一種独特の雰囲気というものをジャズ喫茶は持っている。細川周平は論文「ジャズ喫茶の文化史戦前編」でジャズ喫茶について「四元素（レコード、オーディオ、ウェイトレス、内装・外装）、音楽鑑賞の態度、レコード収集」¹⁸という観点から論じている。現在においてもジャズ喫茶巡りをしていると、たとえば以下の点に気付く。戦前と変わらない特徴としては、

- ・店にあるレコードのリストが整備されている。
- ・レコード（アナログLPレコード）コレクションが豊富。
- ・再生装置各パーツへのこだわりが強い。
- ・大音量で音楽が鳴り響いている。

その他の特徴としては、

- ・鳴っている音楽のジャケットがきちんと客の見えるところに置いてある。
- ・客は原則一人が多い。（黙々と聴いている。本を読んでいる。寝ている。）

¹⁷ 吉田「ジャズ喫茶50年」、一五六頁。

- ・かかる音楽や音響にこだわりの持っているマスター（店主）が多い。
- ・店によっては「私語はひかえめに」という表示がテーブルにある。
- ・トイレの壁や天井などに落書き（政治・音楽について）が書かれたままになっていることがある。

イメージを纏めてみるとお気に入りのジャズをじっくりよい音で楽しみながら、LPジャケットを眺め、ライナーノーツにある情報（曲目・楽器ごとの演奏者・録音年月日・録音にあたってのエピソード・録音技術者の名前・同名曲の違う名演奏がきけるLPの紹介・解説者の嗜好など）を入手する事が出来、自分だけの音楽世界に浸れることが出来る喫茶店といえる。

それ以上に重要な要素としては、自分の聴いたことのないアーティストやレコードを聴かざるを得ない状況にあるため（店を出ない限り）、ときにはもうレコード針を上げてほしいというLPもあるが、初めて聴く素晴らしい音楽との出会いが待っているという点があげられる。現在ではその出会ったLPもしくはCDの音楽タイトルさえ覚えていれば、パソコン等の検索を利用して多くの情報を入手することも出来、楽しみもさらに広がっていく。もちろん店のマスターがいれば、より詳細な興味深い情報も入手可能であろう。そういう未知との遭遇を提供してくれる場所、それもジャズ喫茶の大きな魅力の一つである。

4. オーディオ（再生装置）との関係

当たり前の話ではあるが、ジャズ喫茶はジャズを聴くところである。普通の喫茶店やチェーン店の飲み屋でもBGMとしてジャズを流しているところが多いが、このような場所はジャズを聴くという状況にはない。主体的に聴くために必要なものは再生音の音量と音質である。その二つを満たして

¹⁸ 細川「ジャズ喫茶の文化史戦前編」、二二二頁。

れるものがオーディオ装置といえる。大音量で音楽を聴くことが出来る場所は現在でも限られている。細川がいうには、戦前は「レコード喫茶では一〇銭そこそこで個人宅（特に下宿や集合住宅）では不可能な音量で好きな音楽を聴け」¹⁹、「大音量は家庭では得られない「原音」に近づいたり、にぎわいを演出するのに役立った。これは戦後のジャズ喫茶に確実に引き継がれていった」²⁰。コンサート会場やライブハウスなどではPA装置の大音量を通して、演奏者それぞれの楽器の音が鮮明に聴こえる。特にパーカッション類の音はより鮮明に感じることが出来る。フルバンドが一斉に咆哮するときには逆にスーと静寂すら感じてしまう。それが大音量でジャズを聴く魅力の一つである。

音量へのこだわりと同じように音質へのこだわりというものがある。ジャズに限らないが、レコードやCDをより良い音で再生したいと思うのは音楽愛好家の欲求の一つである。ジャズ喫茶における良い再生音とは何かということに関しては店のマスターの考えが再生装置に表れることも多い。生演奏と違って複製技術を用いて作られたレコード再生における良い音の捉え方は、生演奏の再現にいかにか近づけるかという考え方が多数を占めている。「まるで眼前で演奏が繰り広げられているかのような」という表現で再生音を評価している文章が多くのオーディオ記事に見られることでもそれが理解できる。そして聴取者（客）に鳴っている音をイメージとして思い起こさせてくれるのが店の再生装置を構成するパーツである。ウェブサイトや雑誌に載っている店の紹介などの広告を見ると、どのような再生装置を使って音楽を鳴らしているかを事細やかに記載している店も多い。

二つの要素を満たすオーディオ装置の魅力はじっくり音楽を楽しむ、言い換えれば主体的聴取をするのに必要不可欠のものである。そしてジャズ喫茶ではその場所にいる他の聴取者（客）も同じ装置を通して音楽を聴いているということが主体的聴取に大きく影響している。映画にしても自宅のテレビで観るよりも映画館で多くの客と一緒にスクリーンを見つめるほうが集中して映画の世界に深く浸れる。同じ映像や音楽を共有しているという連帯感がより深くその世界に入り込むための要素となっていると考えられる。ジャズ喫茶でそれを叶えてくれるのがオーディオ装置なのだ。

5. 店のシンボル、マスターという存在

マスター（店主）は音へのこだわりも強いが、それ以上にジャズという音楽それ自体に対する思い入れが強い。筆者はどのような体験はないが、前述のマイク・モラスキーの著作には頑固なマスターとの遭遇に関するエピソードが記載されており興味をそそる²¹。店に置かれたレコードコレクションの内容にもマスターのこだわりは表れる。

現在、日本を代表する小説家、翻訳家である村上春樹もデビュー前の七〇年代はジャズ喫茶のマスターであった。ジャズ批評誌の、どんな傾向のジャズが好きで、ミュージシャンは誰が好きか、という質問に答えて、国分寺「ピーターキャット」のマスターだった頃、「ゲッツ、マリガンが好きです。チック・コリア、ダラー・ブランド、キース等は一枚もないので宜しく」と語っている²²。千駄ヶ谷に移ったあと、別のガイドブックの同様の質問にも「なんでも、（キース・ジャレット以外）」と答えており²³、こだわりの強さ

¹⁹ 同前、二二〇頁。

²⁰ 同前。

²¹ 同前、五一〜五六頁。

²² 『ジャズ日本列島50年版』、七六頁。

²³ 『ジャズ日本列島55年版』、九七頁。

を示している。村上春樹の描く物語にはよく音楽が登場する。最近では「チャリー・パーカー・プレイズ・ボサノヴァ」²⁴という作品もあるが、ジャズ喫茶や好みのミュージシャンを連想させる。

他の有名なマスターたちは同じガイドブックで上記質問に対して、たとえば次のように答えている。「ベイシー」菅原昭二・ホンモノのジャズ8割、シャリコマ2割」²⁵、「イーグル」後藤雅洋・極端な前衛及びクロスオーバーを除く、ごくオーソドックスなものが一番かかる」²⁶、「メグ」寺島靖国・リクエスト以外は全部クロスオーバー・ジャズ・フュージョン。今迄頑張ってきたが、遂にジャズを断念、今様音楽に転向、ジャズは家で、ジャズ喫茶ではクロスオーバーを」²⁷。これらの回答をみると表現の違いはあるものの、各々のジャズへの思い入れが読み取れる。「イーグル」のマスター後藤の著作に『ジャズ喫茶のオヤジはなぜ威張っているのか』というタイトルがあり、その中で「ジャズ喫茶店主の強みは、なんといっても業界のヒモがついていないことだろう」²⁸と述べているが、自分の考えをリアルに発言できる立場にあるということが納得できる。このような個性的なこだわりを持つマスターから音楽やサウンドに関する蘊蓄を直接聴けばジャズの世界の奥深さを垣間見ることが出来る、それもまたジャズ喫茶の楽しみ、魅力の一つに挙げることができる。

6. ジャズ好きの密かな楽しみ——連想ゲーム

ジャズ喫茶巡りの大きな楽しみの一つに、初めて降り立った街を散策しながら路地裏あたりを覗いたときに、ジャズの匂いを感じて、店の扉を開くと

まさに想像していた音が満ちているという場に出会うというものがある。いわば店名とジャズとの連想ゲームである。現在ではスマホを検索し液晶画面に現れた案内通りに歩いてお目当ての店にたどり着くというのが一般的ではあるが、そういうものではなく、予備知識なしに遭遇した店がジャズに満ち溢れていたときの喜び。ジャズ喫茶らしき匂いを感じさせるもの、それは店の名前である。たとえばあるジャズ批評誌の住所録に記載された店名の一覧表²⁹をもとに筆者なりに分類すると次のようになる。

ジャズキーンワードⅡ「アドリブ」、「ダウンビート」、「イントロ」、「ミント
ンハウス」

ジャズ楽曲名Ⅱ「モーニン」、「ミステイ」、「サテンドール」、「ラッシュ
イフ」

ジャズレーベルⅡ「ブルーノート」、「リバーサイド」、「ルーレット」、「サ
ヴォイ」

ジャズミュージシャンⅡ「マイルス」、「オーネット」、「コルトレйн」、
「ドーハム」

ジャズスタイルⅡ「ラグタイム」、「ファンキー」、「スイング」、「ウエスト・
コースト」

ジャズレコードタイトルⅡ「フルハウス」、「グルーヴィー」、「レディ・デ
イ」

このようなジャズを連想させる名前を持つ見知らぬ店に遭遇したときに覚える胸の高まりはジャズ喫茶ファン特有なものである。

²⁴ 村上「チャリー・パーカー・プレイズ・ボサノヴァ」。

²⁵ 『ジャズ日本列島55年版』、二九頁。

²⁶ 同前、七八頁。

²⁷ 同前、一一三頁。

²⁸ 後藤『ジャズ喫茶のオヤジはなぜ威張っているのか』、一九頁。

²⁹ 『ジャズ日本列島1995年版』、二四五〜二七三頁。

7. 記憶の余韻

思い出に残る店は数多くある。音量がとてつもなく大きかった「ジャズオーデイオ」、レコードを聴きながら、演奏の様子が眼前に広がった「ベイシー」、頻繁に通った「レオ」、タバコの煙でLPジャケツトがよく見えないこともあった「コンボ」、などなど。その中でも特に印象に残っているのは熱海から歩いて十分くらいの「ゆしま」という店である。ここの店主は小柄な大正十年生まれのママである。ネルドリップで淹れてくれるコーヒを吸りながら、昔よく訪ねてきたミュージシャンのこと、最近ヨーロッパで流行っているピアノジャズのこと、熱海の歴史のことなどの話を人生の大先輩から聞いている時間は至福のひとつでもあった。

店が思い出に残るのは、そこで不意に訪れる何かとの出会い、そのインパクトの強さゆえのことだろう。新しいジャズとの出会い、再生される強烈なサウンドとの出会い、多くのCDやレコード、雑誌類、アンティークなどで構成される不思議な空間との出会い、そしてマスターとの出会い。これらの快い要素とそこに流れていたジャズが相まって店の印象が決定づけられ、時の経過とともに思い出になっていくにちがいない。

おわりに

現在、ジャズ喫茶は減少傾向にある。それについてジャズ評論家、副島輝人が以下のような要因をあげている。①「一部のジャズが風俗化されて、ことにレコードでは、ジャズ・ファンにとって格別の鑑賞に耐える音楽が少なくなった」³⁰、②「現代ジャズの方法が多様化し、様々なスタイルが生まれたが、その共通項が見出し難く、何がホンモノのジャズかが解らなくなって

いる」³¹、③「オーデイオが普及し、ジャズ喫茶に行かずとも、自宅で好みのジャズを楽しめる様になった」³²、④「再販物も多く出され、個人でも容易にレコードを入手できる様になり、コレクシヨンの価値が希薄になった」³³。それ以外の要因としては、⑤新譜などもスマホで簡単にダウンロードでき、サブスクリプションサービスの利用などにより、どんなジャズも即座に聴くことが可能となったこと、⑤飲食店などでもBGMとしてジャズが流れていて、あえて喫茶店で聴こうと思わなくなったこと、⑥おしゃれなジャズバーなどでカクテル片手に会話をたのしみながらの壁紙音楽としてジャズを聞く風潮などが考えられる。営業時間を夜に絞り、音量を下げ、コーヒではなくアルコール類を主流に出して経営を維持している店も増えている。しかしながらマスターたちのジャズへの愛情の強さによって成り立っている喫茶店も多く残っており、そこでしか体験できないことがたくさんある。店に入る前に感じる高揚感、新しい出会いの予感。そのような普段味わえない空間を提供してくれる場所、それがジャズ喫茶の特色であり魅力である。

〈引用・参考文献〉

後藤雅洋『ジャズ喫茶のオヤジはなぜ威張っているのか』、河出書房新社、二〇〇三年。

今和次郎『新版大東京案内 上』、筑摩書房、二〇〇一年。

今和次郎『新版大東京案内 下』、筑摩書房、二〇〇一年。

『広辞苑』第七版、新村出編、岩波書店、二〇一八年。

酒井真人『カフェ通』(四六書院、一九三〇年)、和田博文編『コレクシヨン・モダン都市文化第12巻カフェ』、ゆまに書房、二〇〇五年、三一―

四六〇頁。

『ジャズ日本列島1995年版』(『季刊ジャズ批評別冊』一九九五年第一号)、

³⁰ 『ジャズ日本列島55年版』、二八六頁。

³¹ 同前。

³² 同前。

³³ 同前。

ジャズ批評社、一九九五年。

『ジャズ日本列島50年版』(『季刊ジャズ批評別冊』一九七五年第三号)、

ジャズ批評社、一九七五年。

『ジャズ日本列島55年版』(『季刊ジャズ批評別冊』一九八〇年第一号)、

ジャズ批評社、一九八〇年。

『ジャズ百科事典』(『スイングジャーナル』一九七八年五月臨時増刊号)、

スイング・ジャーナル社、一九七八年。

野川香文『ジャズ楽曲の解説——ジャズの発達史』、千代田書房、一九六八年。

細川周平『ジャズ喫茶の文化史戦前編——複製技術時代の音楽鑑賞空間』、

『日本研究…国際日本文化研究センター紀要34巻』、国際日本文化研究センター、二〇〇七年、二〇九～二四八頁。

村上春樹『意味がなければスイングはない』、文芸春秋、二〇〇五年。

村上春樹『チャーリー・パーカー・プレイズ・ボサノヴァ』、『文藝界——平成三〇年七月号』、文芸春秋、二〇一八年、四〇～五三頁。

モラスキー、マイク『ジャズ喫茶論——戦後の日本文化を歩く』、筑摩書房、二〇一〇年。

油井正一『ジャズの歴史物語』、アルテスパブリッシング、二〇〇九年。

吉田衛『ジャズ喫茶50年』、『別冊一億人の昭和史——日本のジャズ』、毎日新聞社、一九八二年、一五六～一五七頁。

〈引用・参照ウェブサイト〉

ジャズ喫茶案内「全国ジャズ喫茶&ジャズバーリスト」、<http://jazz-kissa.jp/jazz-kissa-map-in-japan> (二〇一九年九月九日アクセス)。

総務省統計局「II. 喫茶店の「いま」」、「経済センサスから分かる日本の「いま」——平成二六年経済センサス・基礎調査」(統計トピックス No.95)『http://www.stat.go.jp/data/e-census/topics/pdf/topics95_2.pdf (二〇一九年九月九日アクセス)。

〇一九年九月九日アクセス)。

放香堂加琲「店舗紹介／会社概要」、<http://www.hokodocoffee.com/#about> (二〇一九年九月九日アクセス)。